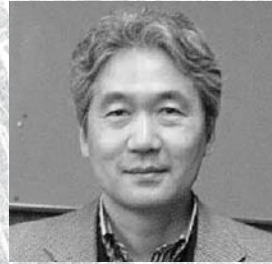


# 深い問題系を提示する

## 『高等学校国語総合』のコンセプト

岩崎昇一

(『高等学校国語総合』編集委員)



三省堂は、平成十九年度版から三種の「国語総合」を揃え、多様化する生徒の学習実態に十全に対応することが可能となった。その中で『高等学校国語総合』（以下『高校国語』）は、特に大学進学を目指す生徒を対象に編集されたものである。このことを踏まえ『高校国語』改訂版のポイントを以下にまとめた。

### 新しい冒頭の顔

新たな出会いにふさわしい「おはよう」をめぐる竹内敏晴の随想「祝福のことば」と評論「水の東西」を並べて冒頭教材とした。旧版では二本の随想を並べてゆるやかな導入としていた。今回随想はこの一本にしぼり、「評論」学習へのステップを早めようとしたものである。「おはよう」は人と人とを結ぶ最初の言葉であり、祝福することはでもある。日常のあいさつに哲学者レヴィナスの考えが引用されて、意義深い考察になっている。さりげない言葉を介して他者と向き合い、相互に関係していくことから始まる高校生活をあらためて自覚させる教材である。また、随想とはいえ決して平易でない考察力が要求され「評論」読解への橋渡しになっている。「水の東西」は評論文の入門教材とし

て定評がある。東西の文化を「水」という身近でかつ象徴的な素材を使って論じたものである。文化を論じてつとに類型的に過ぎるとの意見もあるが、論理構成やノート整理法等で評論入門として有効な作品である。この二本の組み合わせによって、現代文授業の基本的な方針を立てられるものと考えられる。

### 充実した新評論教材

改訂では評論（二）として三本の評論文を採録した。まず西垣通の「情報流」は、「情報」を現代社会の「生命」のネットワークとして捉えなおす。「命あるもののつながりを新たな知見から解き明かすのが、情報学の役割」と論じ、「情報」の積極的な意味を見出そうとする評論である。近代的個人を絶対視する現代社会を生命進化のプロセスにまで立ち入って批判し、情報と人間社会の生きた関係・価値を見出そうとする。「情報」社会の単なる解説ではなく、情報社会に生きる意味、哲学を問いかけており深く考察するに値する評論である。

評論「命はだれのものなのか」（柳澤桂子）は、「生命論」という観点から採録した。自ら生命科学者である筆者自身の闘病

体験をもとに生と死を考察した評論である。現代医療における死の問題にも言及し「安楽死」についての小論文やディベート教材にも援用できる。

竹内啓の評論「地球の有限性と人間」は人口と環境との問題を、近年の信頼できるデータをもとに丁寧論じた評論である。「環境問題」への関心のたかまりとともに生まれる「人間文明の将来に対する悲観論」を退けて「人間相互の協働」を強調する筆者の論点は、「環境」論の指針となっている。また、当面する環境問題をわかりやすく論じ、長文読解の教材としても適している。

新「評論」教材は、いずれも現代評論の主要問題を具体的にわかりやすく論じた評論作品である。これらに、現行の評論「ものことば」（言語）、「見る―考える」（哲学）等をあわせて充実した教材選びとなっている。「国語総合」から「現代文」・小論文に発展していく際に必須の問題系として学習しておきたい。

### 翻訳を加えて充実した小説

小説「羅生門」と「少女」の並びは旧版のままとした。「羅生門」の採録は、各社とも変わらない。三省堂「高校国語」

では手引きや「指導書」が充実している。特に「羅生門」は高校で学ぶ小説教材の要と位置づけ、丁寧な（読み）の実際を提示している。小説「少女」は、「少女」のさりげない言動に微妙な心の揺れを読み取る好評の短編である。小説（二）に「富嶽百景」をおいた。旧版では小説（三）に配置してあったが、年間の授業計画で最も充実した時期に一人称小説の、語りの妙をじっくり味読できるよう配慮した。

また、小説（三）は「紫紺染について」に加えて、新しくティム・オブライエンの小説「待ち伏せ」を村上春樹の翻訳で採録した。ティム・オブライエンはベトナム戦争に従軍した経歴を持つ作家である。「待ち伏せ」は、「お父さんは人を殺したことがあるのか」という娘の問いに、いつか真摯に向き合おうとする「私」（父）が、「戦争の話」を語りはじめるという作品である。〈戦争〉体験を素材に時代状況や人間を考えさせる格好の作品となっている。

改訂ではそれぞれに特徴ある五作品が採録され、学校現場に合わせ適切に選択されるだろう。

### 新しい古文入門

「古典の響き」は音声の響きによって

「古典」の魅力に触れようとするものであり、現行のままとしたが、「古文入門」については、〈初めて古文を学習する〉生徒の立場に立って再考した。読みやすくわかりやすい定評のあるものから、説話「田舎の児、桜の散るを見て泣くこと」「後の千金のこと」「大江山」の三作品を選んだ。

「田舎の児…」は、桜の花の散るのを見て「さくりあげて『よよ』と」泣く「田舎の児」の涙の理由や、それに対する語り手の「うたてしや」の解釈を通して、「古文入門」を図ろうとするものである。「大江山」では歌合せの話題を通して古文世界への理解を深めておきたい。また「唐土の莊子」を話題とする「後の千金のこと」では漢文世界へのひろがりも考慮した。これらは、配当（単位）時間によって三作品を通して学習しても、何れか選択して先へ進むことも可能な並びとなっている。さらに「古文の読み方」・「古語の形と意味」では、仮名遣いや古語の意味や形、文語文法の基本を丁寧に解説した。また「古文の世界へ」では古典学習の意義を説き、採録作品への関心を深められるよう作品解説を加えた。旧版の「古文入門」がやや難解であるのご意見に応えて、

今回大幅に改訂したものである。合わせて「指導書」においても一層丁寧な作りを目指したい。

### 古文教材の充実

「国語総合」の段階で、すべてのジャンルの一通り学習させておきたいとの現場の声がある。「高等学校古典」に発展させるために、文学史を含めた基本事項を一年生のうちに習わせておきたいという考えだろう。大学入試対策として当然である。改訂ではこの点に留意して編集を進めた。結果として、「古文入門」（説話）、「徒然草」（随筆）、「伊勢物語」（物語）、「土佐日記」（日記）、「平家物語」（軍記物）、「和歌」、「奥の細道」（紀行）という並びになった。すなわち改訂版は「土佐日記」門出、黒鳥のもとに、帰京）を新たに加え高校現場の声に応えた。

### 基礎力の漢文

漢文教材は旧版のままとした。近年の入試問題を分析するに「漢文」問題に求められているのは、語の意味や用法・句法の習得など基礎力の習熟である。訓読法から中国古典文学の教養に至るまで、『高校国語』では基礎力の養成を目指し

て編集されている。「古文入門」と同様にはじめて本格的に「漢文」を学習する生徒の視線に立ち、「漢文に親しむ」（五十歩百歩）では、口語訳や解説をつけ平易で丁寧な切り口となっている。

### 合冊本として

「表現編」は現行のままとした。各単元に挿入するかたちで配列し、テーマを選択しても、「表現」学習として通しても利用できる。また、改訂版は「現代文・表現編」と「古典編」を一冊の合冊本としたことから、「付録」は巻末にまとめて置くことになった。

分冊か合冊かの判断は、「国語総合」の授業の持ち方や単位構成等で〈学校現場〉の実態によって意見の分かれるところではある。ただ『高校国語』の採用校が、一年生で「国語総合」を終え、二年次からは「高等学校現代文」・「高等学校古典」に取りかかる進学校が多いと判断し、この度の改訂では、一貫した編集方針が提示できる合冊本とした。

### 最後に、編集委員：

この度の改訂編集作業にあたって、数多くの候補教材を読んだし議論も重ね

た。もちろん採録をあきらめざるを得なかった候補教材の方が圧倒的に多い。教材の評価や選別の基準は、情報やデータをもとにした「編集委員会」メンバーの経験と判断に拠る。現行版に照らして新しいコンセプトや切り口を狙うという編集の方向性はあるものの、基本的には〈恣意的〉なものである。また、同一のテキストも〈読み〉によって価値が変貌する。その意味で出来上がった「教科書」は、今後も実際の使用者からの批判を受けなければならない。

とはいえ限られた時間や条件下で最善を尽くしたし、あらためて通読してみると〈良質のアンソロジー〉が出来上がったと自負している。今後は「指導書」や『高等学校現代文』・『高等学校古典』への架け橋をどうするか考えたい。

岩崎昇一（いわさきしょういち）高校の国語の教師となって二十七年、また国語教科書編修にたずさわって十数年になる。現在は、東京都立国際高校で、国語とともに小論文・受験指導にあたる